



大分市から県南部の5カ所で、大規模な風力発電所の建設計画が持ち上がっています。

①記事のリード(前書き)にある「再生可能エネルギー」とはどんなエネルギーでしょう?また、風力以外にどんなものがありますか?調べてみよう。

大分県内に五つの風力発電所計画がある

名称/風車数(高さ)/最大出力
① 大分ウインドファーム 5基(137m) 2万6000kW ※一部保留前
② 大分・臼杵ウインドファーム 8基(136.5m) 2万6000kW
③ 四浦半島風力発電事業 15基(140~150m) 6万4500kW
④ 彦岳風力発電事業 31基(約200m) 17万5000kW
⑤ 大分南風力発電事業 18基(130~145m) 7万5600kW

※地図はカシミール3Dで作製。kWはキロワット。風車数や最大出力など各数値は計画の見直しで変更になる可能性がある

大分市から県南部の5カ所で、大規模な風力発電所の建設計画が持ち上がっている。いずれも県外企業が半島や内陸の山の尾根に風車を並べ、売電をする構想だ。再生可能エネルギーの普及につながる半面、地元には景観悪化や開発に伴う災害を危惧する声もある。地域資源を活用する事業であり、識者は「進めるには地域の理解を得られる透明性、信頼性が不可欠」と指摘する。

県内5カ所 風力発電計画

市境をまたぐ地域 各事業者ごとにすると、5カ所はそれぞれ大分、臼杵、津久見、佐伯、4市の市境をまたぐ地域。年間を通して発電に適した風が吹き、送電網の容量にも余裕がある。最も建設に近づいているのが大分、臼杵市境の「大分ウインドファーム」。コスモ石油グループのコスモエコパワー(東京)が手掛ける。事業実施の前提となる環境アセスメントを昨年9月に終え、保安林解除の申請手続きをしてい

る。風車は15基、合計出力2万6千kw(約1万5千世帯分の電力)を計画したが、地権者が反対した東側エリアを保留し、西側に5基高さを37m、設置の案を住民に示している。親会社によると、事業化は最終決定しておらず、着工時期も検討中」といふ。 乗り出す電力大手 電力大手も乗り出している。関西電力(大阪)は大分・臼杵ウインドファーム、電源開発(東京)は「四浦半島風力発電事業」を計画し、それぞれ環境アセスの手続き中。 再生エネ事業者はジャパンウインドエンシリアリング(同)の彦岳風力発電事業、ジャパン・リニュー

②風力発電は再生可能エネルギーの普及につながる半面、建設計画が持ち上がっている地元には危惧する(心配する)声もあります。それはどんなことでしょうか?

再生エネ普及に期待 環境懸念、地元反対も

「アップル・エナジー(同)の「大分南風力発電事業」が4月から環境アセスの手続きに入った。 クリーンな再生エネは原発に変わり得る電源として期待が集まる。市民グループ「大分・臼杵の風力発電施設を考える会」(高崎格代表)は普及は賛成だが、規模があまりに大きく景観や生態系が壊される。騒音による健康被害や、地形変化による災害の恐れもある」と懸念する。 自然は地域の資産 「彦岳」の計画は高さ約200mの風車を最大31基設置する国内最大級で、関係する佐伯、津久見両市は反対の姿勢。それを踏まえて

県は6月、「環境などへの影響は極めて重大。抜本的な見直しが必要」との知事意見を出した。 ジャパンウインド社は取材に「あくまでも影響調査に入ったばかりの段階。一方的に事業を進めるつもりはなく、意見は真摯に受け止める」とし、規模縮小もあり得ると述べた。 環境エネルギー政策に詳しい別府大国際経営学部長の阿部博光教授(61)は「地域の自然は地域の資産。それを利用して事業をするのであれば、地元にとんなメリットがあるが大事。互いに利益をもちあらず関係づくりが求められる」と話している。(小林大輔)

③全国で風力発電の設置済み施設の合計出力が高い(多い)地域を三つ挙げてください。

④風力発電計画を進めるに当たって大事なこととして、別府大の阿部博光教授はどんな指摘をしていますか?